

賢明さんが懸命に語る小値賀の旧所名所ばなし

第2話 「おちか」という名前の由来

今回は誰もが一度は疑問に感じたことがある、「おちか」の名前の由来についてお話します。おちかの名前が歴史書にはじめて登場するのは西暦732～740年頃の編纂と考えられる、『肥前国風土記』です。風土記とは、43代元明天皇が諸国に命じて国名や古い伝承や事績等をまとめさせたもので、現在は肥前（長崎・佐賀県）のほか、豊後（大分県）、播磨（兵庫県）、常陸（茨城県）、出雲（島根県）の5つの地域のものしか残っていません。そのうち『肥前国風土記』「値嘉の郷」には次のような記述があります。

値嘉の郷、郡の西南のかたの海中にあり。とぶひのところ三所あり。むかし同じきすめらみこと(景行天皇)めぐりいでましし時、志式島のかりみやにいまして西の海をみそなわすに海の中に島あり、けぶりさにはおほへりき。部従、阿曇連百足におほせてみしめたまひき。ここに八十余りあり。その中の二つの島には島ごとに人あり。はじめの島は名は小近、土蜘蛛大耳すみ、つぎの島は名は大近、土蜘蛛垂耳すめり。そのほかの島はならびに人あらざりき。ここに百足、大耳らを獲りてかへりごとまをしき。天皇みことのりしてつみなひ殺さしめむとしたまひき。時に大耳等のみてまをししく、「大耳等が罪はまことにしぬるつみにあたれり。万〔よろず〕たび殺さるとも罪を塞ぐに足らじ。もしおほみめぐみをくだしたまひて、また生くることを得ば、みにへを造り奉りて、つねにみけにたてまつらむ」とまをして、やがて木の皮をとりて長あはび、おちあはび、みじかあはび、かげあはび、はわりあはび等のためしを作りてみもとにたてまつりき。ここにすめらみことみめぐみをたれてゆるしやりたまひき。またみことのりしたまひしく「この島は遠けれどもなほ近きが如く見ゆ、近島といふべし」とのりたまひき。困りて値嘉といふ。(略)

【概訳】

昔、景行天皇(12代天皇 在位 西暦71年～130年)が九州視察に訪れた時、平戸島の仮の宮から西の海を見ると島があり、煙が多くあがっていた。従者の阿曇連百足[あずみのむらじももたり]を視察にやると、80余りの島々があったが、人が暮らす島は2つだった。はじめの島の名は小近といい、大耳の土蜘蛛(天皇や朝廷の支配に抵抗する豪族のこと)が住み、次の島の名は大近、垂耳の土蜘蛛が住んでいた。そのほかの島には人は住んでいなかった。阿曇連百足は大耳と垂耳を捕らえ、天皇に報告した。天皇は大耳たちを誅殺しようとするが、大耳たちは「私たちの罪は極刑に値し、一万回殺されても罪を贖うことには足りません。でも、もし温情で生かして下さるなら、食事を作り、いつまでも献上します。」と述べ、木の皮を取り、様々なアワビ料理にしてみせた。天皇は温情によって彼らを釈放することとし、「この島は遠いが、まるで近いように見える。よって近島と言うがいい。」と言ったので値嘉となった。(略)

ここにある「小近」は「をちか」、「大近」は「おおちか」と読みます。この二つの島が五島列島のどの島を指しているのかは諸説ありますが、「小近」は現在の「小値賀」であるという学説が有力です。名前が踏襲されている点も大きな根拠の一つで、「ち」が「ぢ」に訛って「おちか」になったと考えられています。もう少し詳細に説明すると「小近」は小値賀島を中心とする上五島地域(宇久、小値賀、中通島、若松島)、「大近」は福江島を中心とする下五島地域(福江島、久賀島、奈留島)を指すとされ、五島列島は二つの勢力圏で分かれていたと考えられています。景行天皇が実在の人物であれば「おちか」の名前の歴史は約1,900年前に求めることができますし、そうでなくとも『肥前国風土記』が編纂された約1,300年前には確実に求められるのです。

私たちが暮らす「おちか」。島の名前が1,000年以上にも渡って現在まで受け継がれてきたと思うと、名前を大切に守り続けてきた先人たちへ、尊敬と感謝の念を抱くのは私だけでしょうか。

ちなみに「ちか(の)しま」(値嘉島、近島、血鹿島など)とは、五島列島全域のことであり、小値賀を個別に指すものではありませんので、ご留意ください。(文責：教育委員会 平田賢明)

昔の小学校校歌

「日本一の校歌もよかつばって、昔の校歌はどげんな歌詞やったつな？」そんな声を聞いて、昔の小学校校歌を思い出して歌ってみました。諸先輩方、覚えちよりますか？ では一緒にどうぞ・・・♪

♪♪仰ぐお山の 霧はれて 朝の香におう 西海に
そぎょうの光 さしくれば まことの道の ひらけゆく
小値賀 小値賀 われらの小値賀小学校♪

私の場合、なんとか一番は出てくるのですが、二番以降はさっぱり・・・おまけに「そぎょう」という漢字も意味も分かりません。友人たちに聞いて回りましたが、「なーんの覚えちよるかよ～」の一言でぶっつん。「アヨ。どげんなうたじゃったつな・・・？」とメロディも出てこない人も・・・。

そこで、昔の小学校校歌の資料を、教育委員会内で調べてみました。が、昔の校歌についての資料は見つかりません。それなら最後の手段と思い、小学校に問い合わせたところ、残念ながら小学校にも無し。念のため、友人の前々校長氏に聞いてみると、「自分も現職の時調べてみたけど、見つからなかった・・・。」という返事でした。

ありゃーこのままじゃ、ほんなこつ「まぼろしの校歌」になるバイ・・・と危機感を感じ、あらゆるつてをたどって探しました。すると、ありました。ありました。やーっとのことと、お目にかかることができました。感謝です。

二番以降は、こんな歌詞でした。

2. 響く世紀の 潮鳴りを 正しく胸に うけとめて
鍛える腕(かいな) 日本の 輝く文化 きずきゆく
小値賀 小値賀 われらの小値賀小学校
3. 校旗すがしい 白鳥の 希望の翼 空かけて
世界の緑野 くまもなく 平和の花を咲かせよう
小値賀 小値賀 われらの小値賀小学校

また、一番の「そぎょう」は、祖業という字で祖先の起こした事業(広辞苑)という意味でした。「光」はこの詩の場合、精神的な面で輝かしいもの、希望をもたらすもの・・・というような意味のようです。

作詞は、林 千利先生。作曲は、伊藤 英一先生。林先生は、確か私の姉が小学校入学のころの校長先生です。姉に連絡すると「小学生には難しい歌詞やったけん、藤浦洸先生に頼んだって聞いたよ。」という話でしたが、確かに小学生には難しい歌詞ですね。でも、とにかく歌詞がわかってひと安心です。

ところで、小値賀小学校の昔の校歌と小値賀中学校の校歌の一番の第一節目に共通して出てくる言葉があります。さてその言葉とは、何でしょうか・・・。

それは・・・「仰ぐお山の」と「野崎のお山」です。みなさんご存知、お山様＝野崎島(沖の神嶋神社)です。お山様が、いかに小値賀島民にとって大事かつ象徴的な存在だったかということが、校歌の歌詞でもよくわかります。

その野崎島が、昨年世界文化遺産に登録されました。やはり小値賀島民にとって、この上ない大きな喜びです。(おまけの話でした・・・。)

先輩方の同窓会などで、昔の小学校校歌ばうとうたりせれば、どんこんとどしか気分になるっち思うとばなー。

